

# ウパニシャッダの成立年代（上）

中 村 元

主要な諸ウパニシャッダの成立順序を定めたのは、かのドイセンである<sup>(1)</sup>。彼は諸ウパニシャッダの文體・言語・内容・相應箇所（parallel passages）の聯闘などを精査して、古くウパニシャッダ十四を取り出し、それを三種に分類して、年代順に次の如く排列した。

- 一 古ウパニシャッダの相對的年代關係
- 二 古ウパニシャッダの絕對年代決定の標揮（以上本號）
- 三 初期及び中期ウパニシャッダの年代的相互關係
- 四 結 論

附論 新ウパニシャッダの成立年代

- 一 古ウパニシャッダの相對的  
年代關係
- 二 中期のウパニシャッダ（散文）  
ブリハド・アーラニヤカ（Brhadāraṇyaka）（特に I—IV）  
タットティリーヤ（Taittirīya）  
アイタレーヤ（Aitareya）  
カウシータキ（Kausitaki）  
ケーナ（Kena）
- 三 中期のウパニシャッダ（散文）  
カータカ（Kāthaka）  
イーシャー（Iśā）  
シヴァーターシュタラ（Śvetāśvatarā）  
ムンダカ（Mundaka）

## マハーナーラヤナ (Mahānārāyana)

## 三 後期のウパニシャッダ (散文)

## プラシナ (Praśna)

## マイトラーヤナ (Maitrāyanīya)

## マーンドゥーキヤ (Māndūkiya)

右の十四の古ウパニシャッダの中でも、前に挙げたものほど早く成立したと云ふのである。大きなウパニシャッダの中には更に新古の層の區別があるが、個々のウパニシャッダを單位として考へるならば、大體右の如き順序に従つて成立したであらうと彼は主張する。

(1) このアーラニヤカの教説は主として祭官の講誦の寓意的説明であつて、ブラーーフマナに接續するものである。哲學的議論は少く、又はつきりと明言されてゐない。ヤーデニヤダルキヤの明確な哲學的議論よりも以前のものであらう。

この成立順序の主張は、その後多くの學者によつて殆どそのまま採用されてゐる。但しキースはドイセンの年代論に反対してアイタレーヤ・ウパニシャッダがウパニシャッダの中では最古のものであり、遅くとも紀元前六〇〇年か五五〇年頃には成立してゐたに違ひないと主張した。<sup>(2)</sup> その議論は次の如くである。

アイタレーヤ・アーラニヤカの二・一・三、二・四一六及び

三はそれべつウパニシャッダとなつてゐるのであるが、その中で、二・一・三及び二・四一六は恐らくブリヘド・アーラニヤカよりも古くであらう。しかも二・一・三の方が一層古く成立した。その理由は次の如くである。

(1) 二・四一六の部分は前の部分に比して思想的進歩の跡が見られる。すなはちアーティマンをブルシャマ・ブランと對比せしめて、その本性を知慧 (prajña) と定めてゐる。從つて前の部分に於けるよりは思想的に明瞭な形を具へてゐるが、しかしながらヤーデニヤダルキヤほど特殊な教説を展開してはゐない。詳しく述べると、(a) 「知る主體は知られない」と云ふ思想が説かれていなん。かゝる思想は後のウパニシャッダ (例へば Ait. Ar. III, 2, 4, 19) などにてやつと現れて來

る。(o) ハーマンのみが眞實であり、他は虚妄であるといふ思想が未だ認められなく。(o) また解脱の説が述べられてゐる。[1]・四一六で「教の眞義を知る者は不死となる」とはれてゐるのをシャンカラやサーサナは直ちに解脱の意味に解するが、兩者は區別さぬべきであら。(o) ブリヘド・アーラニヤカ四・四・五では輪廻が説かれてゐるが、アイタレーヤ・ウパニシャッドでは未だ言及されてゐない。恐らく未だ悟りを開かぬ人間は、ブラーフマナに於けるが如く、死を繰返すのだと思つてゐたのである。アイタレーヤ・アーラニヤカ二・三・三五に *yathāprajñam hi sambhavāḥ* 云々句があるが、それは輪廻に言及してゐるのではなくて恐らく “For their experiences are according to their measure of intelligence.” と譲すべしであら。

この議論は學界に一つの刺戟を與へた。しかしキースの論據に従ふならば、アイタレーヤ・ウパニシャッドが、ブリヘド・アーラニヤカ・ウパニシャッドの中に現はれるヤーデギ・ガルキヤの問答よりも以前に成立したのであると言ふ

とは述べるがもしそれないが、ブリヘド・アーラニヤカ・ウパニシャッドの中のいかなる部分よりも古く成立したと斷定することは不可能である。むろんして思想發展の段階にあてはめにみると、アイタレーヤ・ウパニシャッドの説は原始的であり、ブリヘド・アーラニヤカ・ウパニシャッドの中の深い哲學的思素よりも以前に位置すべきものであるとするといふことは、充分に言ひ得るのであるが、しかしそれだからとて直ちに年代的にそれ以前であるとは斷定し難い。殊に後に紹介する如く、言語的研究の結果がすべて、アイタレーヤはブリヘド・アーラニヤカ及びチャーンドーギヤよりも後のものであるとなりてゐたために、キースの議論は一般學者の承認するに至らなかつた。多くの學者は依然としてドイゼンの成立年代論を殆どそのまま採用してゐる。<sup>(o)</sup>

(o) Deussen: A. G. Ph. I, 2. S. 22 f., 358. *Transactions of the third international congress for the history of religions*, II, Oxford, 1908, 19—24 ドイゼンの議論の年代論を發表する。

(3) A. B. Keith, JRAS, 1906, p. 422 ff. その後<sup>(4)</sup> Aitareya-

*Āranyakā*, Introduction, pp. 41 ff. に於て、アイタレーヤが最

アーナンダ<sup>(5)</sup>を詳解に語じるが、アーナンダ<sup>(6)</sup>は大體前<sup>(7)</sup>の論文<sup>(8)</sup>を翻訳してゐたナリ

由は大體前<sup>(9)</sup>の論文<sup>(10)</sup>を翻訳してゐたナリ

(3) A. Hillebrandt: Aus Brahmanas und Upanisaden, Jena, 1921, S. 170, Ann. 28. H. Jacobi: Die Entwicklung der Gottesidee bei den Indern und deren Beweise für das Dasein Gottes. Bonn und Leipzig, 1923. (三田龍城・伊藤和男著<sup>(11)</sup>『印度古代神廟史』10回<sup>(12)</sup>) M. Winteritz: Geschichte der indischen Literatur, Bd. I, S. 205 f. 高橋順次郎・木村泰賀兩博士『印度哲學史』119回<sup>(13)</sup>等。

たゞ Hume: The thirteen principal Upanishads<sup>(14)</sup>を最も古<sup>(15)</sup>ハシヤハシ十三を大體<sup>(16)</sup>イヤンに從つて年代順に並べてゐるが、たゞマハーナーラーヤナは後世のものとして之に入れず、またシダーラターナ<sup>(17)</sup>を新しく遡り成立したのと解してゐる。すなはちこの順序(相對的年代)に關しては大體意見が一致してゐるのであるが、絶對的年代に關しては諸説紛々として非常に意見が分れてゐたのである。大多數のインド學者はそれらは佛教興起よりも遙か以前に造られたと考へてゐたが、しかし之に反対して最古のウパニシャッドでさへも紀元前六世紀に遡ること<sup>(18)</sup>はできないと主張した學者もあつた。そこで何らかの基準によつてウパニシャッドの年代を確定しなければならないので

## 11 古ウパニシャッドの絶對年代 決定の標準

このやうに古ウパニシャッド相互の年代的前後關係について

では、レイゼンの研究以後、大體に於て諸學者の説は一致してゐて、キースの唱へた異論以外にはさほど著しく見解の相違も存在しないものであるが、しかばそれらの古ウパニシャッドが紀元前第何世紀頃に成立したかと云ふ点に關しては、ドイセン始め諸學者は何ら決定的な斷定を下すことができなかつた。すなはち諸學者は、ウパニシャッド相互間の成立

順序(相對的年代)に關しては大體意見が一致してゐるのであるが、絶對的年代に關しては諸説紛々として非常に意見が分れてゐたのである。大多數のインド學者はそれらは佛教興起よりも遙か以前に造られたと考へてゐたが、しかし之に反対して最古のウパニシャッドでさへも紀元前六世紀に遡ること<sup>(19)</sup>はできないと主張した學者もあつた。そこで何らかの基準によつてウパニシャッドの年代を確定しなければならないので

あるが、ウパニシャッド由體はそのための積極的な手がかりに於した。ウパニシャッドの中には多數の人名が現れてゐるが、それらの人々の年代は全然不明であり、たとひ佛典或ひはヂャイナ教聖典の中にそれと同名の人物が現れてゐるなどがあつても、直ちに同一人であると断定（比定）するなどは出来ないから、年代決定の基準とはならない譯である。しかしこの問題を全然絶望して抛棄することなく、何らかの手がかりを得ようとするならば、次の二方法が考へられる。すなはち（一）古ウパニシャッドの言語文體等を問題として、文法學者ペーニーとの前後關係を明かにすることと、（二）他

の思想系統との關係を明らかにすることである。

† 言語學的研究 古ウパニシャッドはすぐサンスクリット語を以て書かれてゐるが、しかしその言語は必らずしもペーニー文典の規定と一致してゐない。勿論、大體に於いては古典サンスクリットを以て著されてゐるのではあるが、しかし初期のウパニシャッドはヴェーダ語の特徴を示してゐるし、また或るウパニシャッドには俗語或ひは敍事詩の語法の影響

が認められる。なんぞ、ペーニー文典の規定と微細な相違の存することを問題として、個々のウパニシャッドの成立年時がペーニー以前であるか、或ひは以後であるか、を決定するところがであると考へられる。

この點に注目して、純粹に言語學的立場からウパニシャッドの年代決定に最初に寄與したのはヴュッカーの研究である。〔Otto Wecker: Der Gebrauch der Kasus in der älteren Upanisad-Literatur verglichen mit der Kasuslehre der indischen Grammatiker. Beiträge zur Kunde der indo-germanischen Sprachen herausgegeben von Dr. Od. Bezenberger und Dr. W. Prellwitz, XXX (1906) S. 1 ff. 177 ff.〕彼は、古ウパニシャッドの中における格(case)の用法について、徹底的な調査を行ひ、ペーニー文典の規定と整合して、古ウパニシャッドを年代的に四群に分け、その成立順序を明らかにした。その結果は次の如くである。

(1) ブリハド・アーラニヤカ、チャーンドーギヤ、カウシタキの諸ウパニシャッドはペーニー以前のものであり、し

かも恐らくこの順序で成立した。

- (2) アイタレーヤ、タイッティリーヤ、カタの諸ウパニシャッダは恐らくペーニ以前のものである。

- (3) ケーナ及びイーシャー・ウパニシャッダも或ひはペーニ以前かもしれない。少くともその反対に解すべき證據は存在しない。

- (4) シヴェーターシグタラ及びマイトラーヤナ・ウパニシャッダはペーニ以後に成立したものである。

やの後でを續いてキルフニルの研究が發表された (Willibald Kirfel: Beiträge zur Geschichte der Nominalkomposition in den Upanisads und im Epos. Bonn, 1908.Diss.) 彼は、サンスクリットに於いて異常な發達を遂げた合成語の現象に留意した。合成語は特にカーヴィヤ (Kavya) と稱せられる後世の美文體に於いて好んで用ひられたものであるが、そこに至る迄にはかなり長い發達の階梯を経過してゐる。従つて彼は、若干のウパニシャッダ及び敍事詩中の數篇に於ける合成語を検討し、ペーニ、カーティヤーヤナ、パタン

チャリなる三大文法學者の規定或ひは禁止と一々照合して、言語學的に徹底的に論究したのであるが、その結果によると、(1) プリヘド・アーラニヤカ・ウパニシャッダがペーニ以前に成立したものであることは疑なし。

(2) プラシナ、ムンダカ、カタの諸ウパニシャッダはペーニの時代には既に成立してゐた。すなはち、西紀前四〇〇――三〇〇年には既に存してゐた。

(3) シヴェーターシグタラ・ウパニシャッダはペーニ以後である。

(4) マヘーバーラタの中の Rāmopākhyāna, Lokapālasabhaikhyāna 及びラーマーヤナの第11巻第11巻は、その現形について云ふ限り、バタンチャリ (西歴前一五〇年頃) 以後の成立であり、恐らく西歴紀元後のものであらう。——  
更にその後フルストは前二者の研究の後を受けて、古ウパニシャッダに於ける連聲法 (saṁdhī) と名詞並びに動詞の語尾變化について同様の研究を行つて次の結論を得た。

〔A. Fürst: Der Sprachgebrauch der älteren Upanisads verglichen mit dem der früheren vedischen Perioden und dem des klassischen Sanskrit. Zeitschrift für vergleichende Sprachforschung auf dem Gebiete der indogermanischen Sprachen, begründet von A. Kuhn, XLVII, 1915, S. 1-82.〕

- (1) ブリヘド・アーラニヤカ、チャーンドーギヤ、カウシータキなる三「ウペニシャッドは確實にペー」=以前である。
- (2) アイタレーヤ、タイッティリーヤ、カタ、ムンダカの諸ウペニシャッドは恐らくペー=以前である。
- (3) シヴェーターシグタラ及びマバー・ナーラーヤナ・ウペニシャッドは恐らくペー=以後である。
- (4) イーシャー及びケーナ・ウペニシャッドは、ペー=以前であるか或ひは以後であるか、不明である。

かの如く思はれ易いけれども、しかし、言語上の事實に本ぐ年代論は、必らずしも絶對確實であると斷定するに止むべきなら。若しも或るウペニシャッドが特に古風な文體 (Archäismus) を用ひたとしたならば、成立年代が遅いのに古くあるものであるかの如くに誤認される懼れがある。

それと同じ意味に於して、韻律を基準とする年代決定論も、充分に警戒されねばならぬ。例へば、カーダカ・ウペニシャッドの韻律がグラーフマナ文獻のそれと同型であつて、ペーリ文の法句經の韻律よりも古風であるから、カーダカ・ウペニシャッドの少くとも主要部分は佛教以前に成立したるものでなければならぬ、とオルデンベルクは主張してゐる (H. Oldenberg: Buddha, S. 58; das altindische Akhyāna, ZD MG, Bd. 37, 1883, S. 54-86)。しかしうニヴェーダ聖典の一書としての權威を要求するウペニシャッドが古風な韻律にたより、他方民衆の心に訴へた新興宗教である佛教が、その聖頌作製にやゝ崩れた新しい韻律を用ひたことは、當然考へ得る事實であつて、これから年代的な結論を導き出すことは甚だ危険的である。

である。故に總じてかかる言語學的研究に本づく年代論は他の觀點からする議論と照し合せて確かめて見る必要がある。たゞかゝる言語學的研究の功績として、次のことを認めてよいと思ふ。(1) ドイセン始め諸家によつて大まかに想定されてゐた成立年代論が、言語學的研究によつて確められ、他の方面からの反證の無い限り、諸ウパニシャッド相互間の年代的前後關係は略ぼ疑ひ無いものであるといふことが明かになつた。(2) パーニは死せる古典語の文典を作つたのではない。

くと、當時實際に用ひられてゐた言語事實についてその規則を制定したのであるから、言語學的研究によつてパーニ以前の成立と定められた諸ウパニシャッドは、パーニ以前のものと見做すことは困難であらう。従つて古ウパニシャッドの中では、パーニ以後に成立したものが、ここに明かに摘示されたと云つてよい。

たゞ殘る問題は、パーニ以前に成立したと見做されてゐる諸ウパニシャッドが、パーニよりどれだけ古く遡り得るものであるか、と云ふことである。これももはや言語學的研究によつては解決できないから、他の觀點から考察せねばならぬ。そこで當時の他の思想潮流との關係が問題となつて來るのである。

(1) 他の思想潮流との關係他の思想潮流との關係を調査するに當り、先づ第一に問題となるのは、ウパニシャッドの中に屢々現れてくるサーンキヤ説との關係であらう。萬有を三要素の構成物と見做してゐるチャーンドーギヤ・ウパニシャッド六・四の説は、サーンキヤ哲學の先驅思想と見做すことができる。このことを學者は從來屢々論じてゐる。更に中期以後の古ウパニシャッドに於いては、サーンキヤ哲學の影響が著しく現れ、同派の思想或ひは術語・表現法等が非常に多く認められる。<sup>(4)</sup> しかしこれらの特徴は、獨立な學派としてのサーンキヤ派から取り入れたものであるのか、或ひはかゝるサーンキヤ的特徴あるヴェーダー・サンタ思想が發達して、後世サーンキヤ派の二元論の體系を完成するに至つたのであるか、學者によつて説を異にするので、遽かにその何れかに斷定することは不可能である。シヴェーターシヴァタラ・ウパニシャッド

ドやマイトラーヤナ・ウパニシャッドの中に現れてゐるサー  
ンキヤ思想を見ると、當時既に成立してゐたサーンキヤ派の  
體系から採り入れたのではなからうかと考へられるけれど  
も、それもやはり推定の範圍にとどまり、確定的な結論は未  
だ得られてゐない。なほ今後の研究を要する問題である。ま  
だ初期のサーンキヤ派の歴史そのものが不明確であり、他の  
確實な事實との聯關係に於いて大體の推移を想像し得るにとど  
まる状態であるから、サーンキヤ派との關係は、重要な獨立  
の研究題目ではあるが、ウパニシャッドの年代決定の爲には、  
極めて證據としての力の弱いものであると云はざるを得な  
い。

同様にウパニシャッドの中のヨーガの記述も、年代決定に  
は何ら役にたゝぬであらう。ニヤーヤ・ヴィシヌー・シカ思想  
はウパニシャッドと殆ど何らかゝりがない。そこで最後に  
佛教との關係が注視さればならない。

正統バラモン(婆羅門)系統の歴史は非常に不明確であり、  
この系統の資料だけでは歴史的變遷の輪郭さへも知ることが

できないのに、佛教史は支那との交通・經典の翻譯等に關す  
る記錄を基として大體の輪郭が明かにされてゐる。従つて古  
代並びに中世インドの歴史は、佛教關係の資料に本づいて明  
らかにされることが多いといふ實情である。故にウパニシャ  
ッドの年代決定の爲にも當然佛教との關係を問題とすべきで  
ある。殊にいはゆるヴェーダ成立年代の通説なるものは、佛  
陀の生存年代を基準となして、諸學者が推定によつて算出し  
たものであるから、若しも佛教との關係を無視するならば、  
ヴェーダ年代論一般が成立し得ないのである。<sup>(6)</sup>従つてウパニ  
シャッドの年代に關しても、佛教との關係が非常に重要視さ  
るべきである。從前に於いてもこの點に留意して、先づ言語  
學的に、ウパニシャッドの中に、佛教梵語或ひはペーリ語の  
特徵を見出す研究が行はれてゐる。<sup>(6)</sup>さうして幾分成績を擧げ  
てはゐるけれども、しかしそれを以て直ちに佛教梵語或ひ  
はペーリ語の影響が現れてゐると斷定することはできない。  
ブリハド・アーラニヤカやチャーンドーギヤの如き古いウパ  
ニシャッドの中に、既にヴェーダ語の文法によつても古典梵

語の文法によつても解釋し難い語尾變化が屢々見受けられる。ペートリンクの如き學者は、それらをすべて寫誤と見做して、通讀に都合よいやうにペニニ文典の規定に従つて訂正して出版してゐるが、それは文献學的には正しい方法とは云へない。それらはむしろ當時の民衆の用ひてゐた俗語の反映であると解せられる。同様に、中期或ひは後期のウパニシャッドの中に認められる異常な語尾變化は、やはり當時俗語の影響を受けてゐたものであり、その俗語がたまゝ、ペーリ語や佛教梵語と似てゐたと云ふだけにとどまる。當時の俗語の文献口碑が殆んど全部散佚消滅してしまひ、學者は殘存せる正統バラモン系統及び佛教の文献についてのみ比較研究を行ふから、ペーリ語の影響などと直ちに簡単に推定するのであるが、當時ペーリ語に類した俗語は非常に多數相ひ並んで存在し、盛んに行はれてゐたであらうから、單に語尾變化

は佛教に於ける用法の先驅と見做さるべきであつて、佛教の影響と解すべきではないから、従つて年代決定の爲には直接には役立たない。従つて我々は更にもつと具體的な手がかりを求めなければならない。

佛教との關係について、我々は先づカータカ・ウパニシャッドを問題としよう。このウパニシャッドは、大部分の印度學者によつて恐らく佛教以前の書と推定されてゐるのであるが、嘗つてシュチャエルバツコーエ教授は同ウパニシャッドの次の文句(四・一四及び一五)を問題として、これは恐らく佛陀以前に於ける佛教の先驅思想に言及して、それを異端説として排斥してゐるのであらうと考へた。<sup>(9)</sup>

(一四) 恰も雨水が山中の險路を分れ流るゝが如く、

その如く諸法を別異なりと見る考は、諸法に從ひて流れ去る。

(一五) 恰も清淨なる水の中に注がれたる清淨なる水に佛教の影響を受けたとは云へないのである、また古ウパニシャッドの中に佛教語らしい用語も認められが、しかしそれ

は、それと同じく(清淨と)なるが如くに、ガウタマよ、知識ある聖者のアートマンもそ

の如く（清淨と）なる

この場合、「諸法」の意義が問題となるが、ヴェーダ文献一般に於けるダルマの意義ではこの箇所の意味が通じないから、これは佛教で「ダルマ」の意味であらうと考へるのが當然である。（シャンカラは「ダルマ」なる語を「トームタ」）の意味に解して、*“dharma” ātmane bhīmān “prathak paśyan”* と註釋しているが、これが他の文献に例のなく無理な解釋であることは、*「Hymns of the Rig-Veda* and the *Upanishads* の G. K. IV. 1; 10; 46; 53; 81; 91; 92; 96; 99 の dharma も佛教的な意味であるのに、シャンカラは同様に ātman と註釋している。このことは既にカイダルが氣附いていたのである

が、その後シュチャエルベックロイは次の如く主張した。「この頃には、不死なるアーティアを説く一元論に強く反対し、その代りに「分離せる（種々なる）要素」（separate elements）の理論を懷んでいた學說が言及され、やつしてそれが排斥されてゐるのである。ダルマがかかる意味に用ひられてゐることはウペニシャッドの中に他に例がないから、これ

は當時の新しき異端説、すなはち或る種の「無我・法の理論」（anātma-dharma-theory）が言及されてゐるにちがひない。

佛教の先驅思想と認められるやうな考へ方は、初期ウペニシャッドの中にも認められるから、正統バラモンの社會でアーティアの明確な觀念が確立した時代に、「無我」「法」の理論を懷じた或る種の「佛陀以前の佛教」（pre-Buddhistic Buddhism）が既に存在してゐたにちがひない。これがカータカ・ウペニシャッドの時代であり、また或ひは「チナ以前の

チャイナ教」（pre-Jinistic Jainism）の時代、かたはち四紀前八世紀のペールシカ・ナータ（Pārsava-nātha）の時代であるかも知れない」（<sup>(1)</sup>）。

シュチャエルベックロイのがゝる推定も一應尤もであるが、しかし彼の主張には二つの誤った前提が存する。（1）には、カータカ・ウペニシャッドは佛教以前に成立したものであるといふインド學者一般の漠然たる推定を、確定説なるかの如くに先に決めてゐることであり、（1）には、諸法別異を説いた說一切有部の思想が、そのまま、佛陀の眞説である、と考

くべるんじやある。後者が誤りであるといはば、ゆゑてだらし、

また前者は未だ充分に證明されてゐない單なる想像説にすぎない。従つて教授の説をそのまま採用することはできぬのであるが、しかし既述の如く、この「諸法」は佛教的用法であることは疑なし。否、我々は漢譯阿含の中に右の二句と同じ構想を有する文章を發見する。すなはちバッチャ(Vaccha)姓の遊行者(遍歷者 paribbajaka)へ世尊の對話を記す經典に次の如くある。

憤子復言。瞿曇。我今樂說譬喻。願聽我說。佛告之曰。隨汝意說。譬如天降大雨。隨下水流。注于大海。汝之教法。亦復如是。男女長幼。及以耆老。蒙佛法雨。於長夜中。盡趣涅槃。善哉瞿曇。善哉妙法。善哉能入佛教法者。

(別譯「釋阿含經」第一〇)  
大正二卷四六頁下)

婆蹉白佛。如天大雨。水流隨下。瞿曇法律亦復如是。比丘尼。優婆塞。優婆夷。若男若女。悉皆隨流。向於涅槃。浚輪涅槃。甚奇佛法僧平等法律。(釋阿含經第三四卷大)これに相當するペーリ文としては『中経』(MN. No. 73,

Mahā-vaccha-gotta-suttanta) の中に次の如くあるが、雨水には言及してゐない。そこにはヴァッチャ姓の遊行者が世尊の教法を讚嘆する言として次の如く云ふ。

卿ゴータマよ。恰も恒河は大海に向ひ。大海に趣き。大海に傾き。大海に觸れて安住するが如く。まさにその如く此の卿ゴータマの。在家・出家をともなふ衆會は。涅槃に向ひ。涅槃に趣き。涅槃に傾き。涅槃に觸れて安住す。偉なる哉。卿ゴータマよ。偉なる哉。卿ゴータマよ。恰も。卿ゴータマよ。倒れたるを起こし。覆はれたるを露はし。迷る者に道を教へ。眼ある者は色を見るべし。とて闇中に燈を齎すが如く。かくの如く卿ゴータマによりて種々の方便(異門)を以て法が示されたり。(Anekapariviyayena dhammo pakasito)<sup>(2)</sup>

すなはち、地に降下した雨水が、互ひに分れて流れて行くが、最後には大海の中に歸入するが如く、佛陀は種々なる法を説いたが、そのうちによると結局は涅槃に入る事がでかいのやうで、それらの諸法を別異なるものと見做しては

ならぬと附ふのである。これを前掲のカータカ・ウペニシャッードの文句にあてはめて解釋するならば、極めて容易に趣意を理解するに至る。従前のヨーロッパの學者のもの解釋よりもよほ適合することが解る。またシャンカラ註の誤りや、ゆるいといふものから明かである。従つて前掲の句は、佛典の文句をカータカ作者が書き換へて、こゝに取り入れたのである。この箇所に於ける「ダルマ」なる語は、正統バラモンの書に於いては殆んど實例のない用法であるから、この事はよく確かめられ、その逆では有り得ないことも明らかである。また右の二句が、カータカ・ウペニシャッードの中や奇異な感を與へてゐることも、それによつて充分に説明され得る。勿論、このウペニシャッードに於ける右の「ダルマ」なる語は、その箇所に於いては、「教法」の意味ではなく、むしろ作者は漠然と「もの」と云ふ意味を附してゐたのがも

だねえか。

「ガッチャ 姓の遊行者に關する經典とカータカ・ウペニシャッードとの類似は、なほ他の點にも存する。カータカ・ウペニシャッードの筋書を見ると、ヤマ神（死神）がナチケータス（Naciketas）に三種の恩典を隨意に選ぶことを許したのに對して、ナチケータスは第一に父が自分に對する怨を諒め、心和ぎ、好意ある者となること、第二に人を天上界に導く祭火を教えて貰ふことを願ひ、第三の恩典として次の如く望んだ。

死せる人間に關して此の疑あり、——或る人々は、「彼は存在す」と云ふ。また他の或る人々は、「彼は存在せぬ」と云ふ。我は此の事を汝に教へられて知らんといふ。

これが諸恩典の中の第三の恩典なり。(Kashaka-Up. I,

20)

しれないと考へられるが、しかる「もの」を意味する他の語を用ひなう。特に「ダルマ」なる語を使用して右の譬喻にたよつたことは、やはり佛教の影響であると解するものが至當

心んで死神が驚いて、これだけは思ひ止まれ、と云ふのは、ナチケータスが懇願して退かぬので、死神は遂にその祕義を明すのであるが、その祕義とはアーティアに關する教であつ

て、死後に人間は存在するとか、或ひは存在しないとかじふ

一方的な斷定ではない。(たゞアートマンの存在は極力強調されてゐる)。さうしてカータカ・ウパニシャッドに於ける此

の中心問題が、またヴァッチャ姓の遊行者に教へる經典の中心問題の一つとなつてゐるのである。すなはちペーリ語の『中

部』聖典(MN. No. 72, Aggivacchagotta-sutta)<sup>(13)</sup>を見る

と、ヴァッチャ姓の遊行者が世尊に對して形而上學的問題に關して種々説明を求めるのに對して、世尊は次の如く教へたとされてゐる。

「卿ゴータマよ、卿ゴータマは『タターガタは死後存<sup>(14)</sup>す。これは眞なり、他は虚妄なり』といふ斯くの如き意見なりや。」

す。これは眞なり、他は虚妄なり」といふ斯くの如き意見なりや。」

「ヴァッチャよ、われは『タターガタは死後存す。これは眞なり、他は虚妄なり』といふ斯くの如き意見なるには非ず」

「卿ゴータマよ、卿ゴータマは『タターガタは死後存せず、これは眞なり、他は虚妄なり』といふ斯くの如き意見なるには非ず」

見なりや。」

「ヴァッチャよ、われは『タターガタは死後存せず。これは眞なり、他は虚妄なり』といふ斯くの如き意見なるには非ず。」

また後の箇所では次の如く云ふ。

「ヴァッチャ曰く」「卿ゴータマよ、かくの如く解脱心を有する比丘は何處に往生するや」

「ヴァッチャよ、往生すると云ふは當らず。」

「卿ゴータマよ、然らば往生せざるや。」

「ヴァッチャよ、往生せずと云ふは當らず。」

さうして以下に於いて、この意義を詳しく説いてゐる。かくの如く、佛陀も死後の生存といふ形而上學的問題を論じながら、それに對する肯定的或ひは否定的な一方的な斷定を誤謬であるとして、絶対の眞理に順隨する法を教へたのであるから、この問題に對する解答が非常に類似してゐることが明らかである。かゝる思想は原始佛教經典の中の所々に散説されてゐることであり、必ずしも珍らしくないが、前に問題と

したダッチャ姓の遊行者に關する經典の中にやはり説かれてゐることは、注目すべきである。

更にカータカ・ウパニシャッドに於いては、死後生存の問題に關する前述のナチケータスの請問に對して、死神は直ちに次の如く答へてゐる。

この問題に關しては嘗て神々すらも疑へり。實に容易に知り得べきことに非ず。この法は微妙なり。

ナチケータスよ。他の思典を選べ。我を苦しむこと勿れ。我が爲にこの（經典を）棄捨せよ（<sup>(15)</sup>Kāthaka-Up. I, 21）

この場合の dharma も佛教的意義であるが、右のダッチャ姓の遊行者に教へる經典に於いても、死後の生存等の問題を論じた後で、同様のことを説いてゐる。

ダッチャよ、この法は實に甚深、難見にして、覺り難く、寂靜、殊勝、慮絶、微妙にして、智者によりてのみ知らるゝものなり。それは異なれる見解に從ふ者、異なる者、異なれる興味を懷く者、異りて實修する者、信を持つ者、異なる者による汝によりては、知り難きものなり。

（MN. Vol. I, p. 487.）

なほ眞理が微妙にして極めて見る事難かるものであるといふことは、佛典のうちの極めて古いガーター（韻文）のうちにも説かれてゐる。例へば、釋尊が成道直後に人々に説法することを躊躇した際の心境を示す詩句として、

わが苦辛によりて達したるこのじとを、いま説くべき要なし。

貪欲と瞋恚とに敗れし人々には、この法はいとも悟り易きものに非ず。（nityan dhammo susambhudo）

世の常の流れに逆らひ、微妙にして、深く、見難く、微妙なり。  
(nipumam gambhiram dudhamam anum)

かくの如く思想並びに表現法の類似・問題提出並びに解決の順序の類似などから考へてみても、カータカ・ウパニシャッドはどうしても佛典の影響を受けたものであると斷定せざるを得ない（<sup>(16)</sup>）。たゞ數多い原始佛教經典の中で、特にダッチャ姓の遊行者に教へた經典が、カータカ・ウパニシャッドと特に

關係が深いのは何故であるか、その事情は不明であり、今後  
の究明に俟つべきである。

なほ死後に於ける靈魂の有無は、佛陀時代の思想界に於ける一般的な共通論題であつたらしく。佛陀と同時代に生存してゐた六人の著名な哲學者（いはゆる「六師」）は、多かれ少なかれこれを問題としてゐるのであるが、特にカータカ・ウパニシャッドに於ける扱ひ方に最も類似した言説の傳へられてゐるのは、懷疑論者サンチャヤ・ベーラッティブッタ（Sāñchaya-Belatthiputta）である。彼は、いかなる形而上學的質問を受けても、断定的な解答を與へずに、眞意が曖昧模糊として取りとめなく捕捉し難い答をなしたので、彼の學說は「鰻のやうなならぬらして捕へ難い議論」（amaravikkhepa）と呼ばれてゐたのであるが、ペーリ文『沙門果經』に擧げられてゐる彼の説の中には次の如き文が存する。

「汝若し他世あり、といふにつきて問はむに、われにして若し他世ありと考へたらむには、他世ありと汝に答ふなるべし。されどわれはかく考へず。然りとも考へ

す。其の他にも考へず。然らずとも考へず。然らずとも非ずとも考へず。

「汝若し他世なしとふにつきて問はむに、……（以下前文と同じ）」

「…………（中間略）……」

「人（tathagata）は死後存す、存せず、存しまた存せず、存するにも非ず、存せざるにも非ず、といふにつきて問はむに……（以下前文と同じ）」

従つて、佛陀時代に於いてかゝる問題について種々異説が存在し、それらが、このやうに一定の形式にあてはめてまとめられてゐたのである。さうしてカータカ・ウパニシャッドも、思想界のかゝる傾向の影響をほのかに受けてゐるのであり、時代的にもそれ以後であると云はねばならない。しかし、カータカ・ウパニシャッドの成立は、どうしても佛教興起以後であると考へねばならない。

かつてオルデンベルヒは、カータカ・ウパニシャッド、少

くともその前半は、佛教以前に成立したものである、と主張

した。その理由は、死神が求道者ナチケータスを誘惑し現世の快樂に耽らしめようとする話は、成道前の釋尊を悩ました魔(Mara)の話に比せらるべあるが、カーラカ・ウパニシャッドに於いては、その話の輪郭が未だ成立途上にあり完成してゐないからであると云ふのである。しかし死神の誘惑の話はヴェーダ文献の中には他に見當らないから、むしろ佛典の影響を受けてかゝる物語を空想したと考へる方が、遙かに合理的であらう。佛典に於ける魔の様相の方が遙かに完成したものであることは事實であるが、後世に至つても純粹な正統婆羅門系統の書に於いては、萬事が佛典に於ける程大がかりに描寫されることは無いから、敍述の單純といふことは、必らずしも年代的に以前のものであることを立證するものではない。また同じ原始佛教聖典のうちでも最古層を表明するもう一つのガーター(韻文)のうちにあらはれる魔の様相は、極めて素朴單純である。さうして、殊に眞理を聞く爲に身命を抛たんとしたナチケータスの態度は、佛典に現れる求道者

の態度を思はしめ<sup>(21)</sup>。

この點で非常に良く類似してゐる一例として、われわれはチャータカ(Jataka)第五三七の大スター・マ本生譚(Mahasutasomajataka)を擧げることができる。それによると、スター・マ王子が身を捨てる覺悟で「人食ひ」(porisada)のために法(dhamma)を説いたところが、人食ひは全身に歡喜に打たれ、王子に四種の恩典(惠與 varā)を授けることを約束し、何でも自分の希望を述べよ」と云ふ。そこで王子は、先づ三種の恩典を順次に望んだ後で、最後に人食ひが人肉を喰ふことを廢めることを恩典として望む。人食ひは、これだけは聽き届けることができない、と云つて拒むが、王子の諄諄たる說得にはだされて、遂に人肉を食ふことを廢めてしまふ。——以上が物語の大要であるが、こゝではスター・マ王子は身を捨てて法を實現したのである。この本生譚は物語の構成に關して著しくカーラカ・ウパニシャッドと類似している。兩者を成立せしめた詩作家の間には何らかの點で文化的に連絡があつたにちがひない。身をして法を求める云ふ

ことは、佛典に於いて特に強調されてゐる道徳である。

なほ、修行者が神から恩典として倫理的な法を受けるといふ構想は佛典の物語のうちにその外にも現れてゐる。例へばカンハ・ダヤタカ(チャータカ第四四〇)によると、帝釋天が娑羅門カンハに後者の欲する恩典(artha)を與へようとする。そこでカンハは恩典としては「よく怒ることなく、憎むことなく、貪ることなく、戀慕することなく、わが行ひをわれは望む」と云ひ、帝釋天からこの恩典を受けたと云ふ。

以上に指摘したやうな幾つかの證跡についてみると、われわれは、カータカ・ウパニシャッド全體に亘つて、原始佛教の影響の跡の著しいことに、もはや眼を蔽ふことはできない。

さてカータカ・ウパニシャッドの中でも特に、第一編(I adhyaya)が古く成立し、第二編は後に附加されたものであるが、<sup>(22)</sup>このやうに佛典の影響を受けてゐるとすると、カータカ・ウパニシャッド第一編は、當然佛陀滅後に成立したものでなければならぬ。佛陀の入滅は紀元前三八六年頃<sup>(23)</sup>であるから、カータカ・ウパニシャッドの前半は、早くとも紀元前四世紀中葉に成立したものでなければならぬ。さうして後半

すなはち第二編は更に遅れて成立したものであるから、同ウパニシャッドは、紀元前四世紀中葉から後半にかけて、すなはち三五〇—三〇〇頃に著されたものであると云ひ得るであらう。或ひはそれよりも更に遅いかも知れない。ところで前掲の言語學的研究の結果によると、カータカ・ウパニシャッドは恐らくペーニ以前に成立したものであらう、といふことになつてゐるが、ペーニは紀元前三五〇年頃に生存した人であるといふのが學界の定説とされてゐるので、一見それと矛盾するが如くに思はれる。しかしながら、ペーニ文典は當時の生きた言語について規則を抽出し排列したのであるが、ウパニシャッドたるとして造られたカータカ・ウパニシャッドは、たとひ同時代に成立したものであつたにしても、古風な表現法・語法を用ひることは當然であるから、ペーニ以後の成立と見做しても何ら差支へない。あの廣いインドの土地に於いて、ペーニと同時代、或ひはその直後の人々が、すべてペーニ文典の規定に従つて著作をなしてゐたとは考へられない。またペーニの年代なるものも、學界

に於いては紀元前三五〇年頃といふのが定説となつてゐるが、その根據は極めて薄弱であり<sup>(24)</sup>、むしろそれ以後と考へても差支へない。宇井博士は<sup>(25)</sup>、カータカ・ウパニシャッド等は紀元前三〇〇—二〇〇年前後頃に作られたものと想定されねるが、かく考へることも可能であり、少くとも博士のこの年代論の反證となるべき資料は一つも存在しないのである。従つて、若し學界で一般に認められてゐるペニニの年代をひとまづ承認するならば、カータカ・ウパニシャッドの成立年代は紀元前三五〇—三〇〇頃となるのであるが、若しもそれを無視するならば、三五〇—二〇〇年と考へてよいであらう。なほカータカ・ウパニシャッドはバガヴド・ギーターの文句を引用してゐるから、ギーターよりも後に成立したものであると考へる學者もあるが、しかし實際はむしろギーターがカータカ・ウパニシャッドの文を採用したのであると解すべきであらう。かくて我々はこゝにウパニシャッド年代決定の爲の一つの礎石を獲得したと云ひ得る。

ところで諸學者の等しく認めてゐる如く、カータカ・ウパ

ニシャッドは、中期の古ウパニシャッドの中では最も古く成立したものであるから、中期並びに後期のウパニシャッドは、それよりも以後に成立したにちがひない。まづシヴェーター・シヴァラ・ウパニシャッドは、カータカ・ウパニシャッドよりも遅れて成立したものであり、また原始佛教聖典よりも後に成立したものであると考へられてゐる<sup>(26)</sup>し、更に前掲の言語學的研究によると、ペニニ以後に成立したものであるから、その年代はほど紀元前三〇〇—二〇〇或ひはそれ以後と見做してよいであらう。大毘婆沙論の中に、シヴェーター・シヴァラ・ウパニシャッドの中の二頌が續けて引用されてゐる<sup>(27)</sup>ところが大毘婆沙論はクシャーナ王朝のカニシカ王（西紀一〇〇—一五〇年頃在位）の保護のもとに編纂されたものであるといふ傳説を、玄奘が傳へてゐる。この傳説の歴史的事實性は最近の研究によつて否認されるが<sup>(28)</sup>、しかしどもかく龍樹の出現する以前（或ひは同時代）に編纂されたものであることは、恐らく確かであらう。従つてこのウパニシャッドがそれよりも以前に成立してゐたことは疑ひ無いか、實際の

成立年代はそれよりも更に遙かに古い時代に遡らねばならぬと考へられる。なほシヴェーターシヴァタラ・ウパニシャッド中の文句が若干、マハーバーラタの中に殆んどそのまま引用されてゐる事實も、右の年代論の側面からの傍證となる。

またマイトラーヤナ・ウパニシャッド(Maitrayana-Upanisad)が、佛教の影響を受けてゐて、佛教興起よりも遅れて成立したものであることは、諸學者の一致した定説である。<sup>(32)</sup>

これは初期ウパニシャッドの如く散文で書かれてはゐるが、この散文にはもはやヴェーダ文献の特徴は認められず、言語。

文體・内容ともに、古典サンスクリット文献を思はせるものがあり、またサーベンキヤ哲學の影響が著しい。このウパニシャッドをシャンカラが『アラフマ・ストラ註解』に於いて一度も言及引用してゐないから<sup>(33)</sup>、このウパニシャッドは、當時までに成立してゐたにはちがひないが、未ださほど重要視されてゐなかつたのであらう。ともかく最後の二のウパニシャッドをシャンカラが引用してゐないといふことは、この兩者が、古のウパニシャッドの文句に準據したと思はれる箇所が少くないから、マイトラーヤナ・ウパニシャッド全體はそれ以前に成立してゐたに違ひない。<sup>(34)</sup> マハーバーラタは四世紀には大體

現形の如く成立してゐたし<sup>(35)</sup>、また大部分は紀元二〇〇年頃までに作られてゐたと推定され得るから、従つてマイトラーヤナ・ウパニシャッドの成立した年代は、それよりも相當以前であると考へられる。

なほマーンヅーキヤ・ウパニシャッド(Māndukya-Upanisad)については他の機會に詳細に論ずることとするが、マイトラーヤナ・ウパニシャッドよりも遅れて成立し、また大乘佛教の空觀思想の影響を受けてゐるから、恐らく紀元後スートラ註解』の中に於いて、マーンヅーキヤには一度も言及引用してゐないから<sup>(36)</sup>、このウパニシャッドは、當時までに成立してゐたにはちがひないが、未ださほど重要視されてゐなかつたのであらう。ともかく最後の二のウパニシャッドをシャンカラが引用してゐないといふことは、この兩者が、古のウパニシャッドの中では比較的に遅く成立したものであることを物語つてゐると考へられる。

以上他派の思想との交渉の跡の著しい諸ウパニシャッドを

逐次検討したのであるが、これに反して、カータカ・ウパニシャッド以後に成立したものであつても、復古主義的純粋なダーランタ的ウパニシャッドは、年代決定が専々困難である。ムンダカ・プラシナ兩ウパニシャッドは、前掲の言語學的研究の結果に本づいて、大體カータカ・ウパニシャッドから余り隔らぬ時代に作られたと考へてよいであらう。ドイゼンは、ムンダカを中期ウパニシャッドの中に數へ、プラシナを後期ウパニシャッドの中に屬せしめてゐるが、しかし韻文で書かれてゐるから古く、散文で書かれてゐるから新しいとは云へない。兩者の間に大きな年代的間隔を認めることは不可能である。またマハーナーラーヤナ(Mahabharata)ウパニシャッドについては諸學者の見方が必ずしも一致せず、ドイゼン等の學者はこれを中期ウパニシャッドに屬せしめてゐるが、また他の學者はそれは古ウパニシャッドの何れよりも新しいと考へてゐるので、いま遠かに何れかに斷定することは不可能である。

さて中期並びに後期の古ウパニシャッドの年代を大體この

やうに定めるとすると、中期ウパニシャッドの大部分に佛教の影響が認められないのは何故か、と云ふことが問題となるが、しかし佛教の影響が認められないと云ふことは、佛陀以前に成立したと云ふことを積極的に論證し得るものではない。佛教がインド一般に廣く弘まつたのはアショーカ王以後のことであるが、しかしそ以後の時代になつても、農村、山村に於けるバラモンの勢力は牢固として抜くべからざるものがあり、決して全印度が佛教化したのではない。バラモンたちは依然として農村山村に於いて庶民の歸依を受けつゝ、全然佛教とは無關係に自分らの聖典を編纂してゐたと考へられる。従つて中期ウパニシャッドに佛教の影響が認められず、また時には低級な思想が説かれ幼稚な表現が用ひられてゐることがあつても、その成立年代を古く考へねばならぬ必要は存しないのである。すなはち佛教と正統バラモンとは、その依存する社會的地盤を異にしつゝ、併行的に發達して行つたのである。かく解するならば、容易に説明がつくであらう。

(一) 窓ノサ Max Müller (ASL, P. 313) ザベーネル世代の聖典論

KOO—「〇〇年頃に」ト—ニヤカ (カクニハナムセキ) シテスモアラム

シテスモアラムの世代に屬する。 Radhakrishnan (Ind.

Phil, Vol. I, p. 142) ザ、初期のカクニハナムセキは聖典論 | 〇〇

〇—「〇〇年頃の盛期に」ト Belvalkar (Lectures, pp. 44-45)

セ、カクニハナムの如ニマハカバハ聖典論 | 〇〇—「〇〇

世の成立を観做し」と。ハ、人間の聖典論ナガム、カクニハナム

〇年代を知るに巡回が爲す。

(二) Hopkins, JAOS, XXII (1901), n. 1. たゞ Rason (Ancient

India, p. 181) ザ、聖詮は聖典論(〇〇年頃)成立したと記憶しし

最古のカクニハナムセキ聖典論(〇〇年頃)成立したと記憶しし

カ。

(三) Th. Stcherbatsky. Central conception of Buddhism, pp. 68 ff.

(四) Magdalene und Wilhelm Geiger (Pali Dhamma, München,

1920, S. 9) ザ、佛教徒の意味は般若のdharmaの聖典セキニカ。

カクニハナムセキは「聖典」である。即ち「聖典」は「聖典」である。

(五) Otto Wecker: Der Gebrauch der Kasus in der älteren Upanisad-Literatur, S. 203.

(六) R. E. Hume: The thirteen principal Upanishads, pp. 8-9; R. Garbe: Sankhya Philosophie, S. 21, Ann.; S. 28 f.

(七) cf. Winteritz: History of Indian literature, Vol. I, pp.

290 f.

(八) cf. R. E. Hume: op. cit. pp. 6-7

(九) cf. R. E. Hume: op. cit. ザ H. Oldenberg (Die Lehre der Upanishaden, S. 131, Ann. 1) ザ pratibuddha (Brahad. Up. IV, 4, 13) ザ、教説の表現である。

(十) 窓ノサ H. Oldenberg: Die Lehre der Upanishaden, S. 288-289; O. Strauss: Die indische Philosophie, S. 64 ザ、Keith (Buddhist Philosophy, p. 138) ザ、カクニハナムセキ原始佛教論

聖典の記述である。

(十一) 窓ノサ Jacobi: Die indische Philosophie, in „Das Licht des

Ostens”の中の同様の見解を發表してゐる。

(12) MN. Vol. I, p. 493 以下ペーリ文の引用は、南傳大藏經中の譯文を多少改めて掲載す。

(13) MN. Vol. I, pp. 483 f,

(14) tatiñgata とは「如來」と譯される語であるが、必ひかしの佛

教釋曰の語で、<sup>トガタ</sup>。チャイナ教の聖典 Āyūraṅga-sutta, II, 16,

2 ピュ聖者を tatiñgaya bhikkhu (= tatiñgata bhikṣu) とする。  
ふく。宇井博士は屢々「真人」へ譯して記した。

(15) 「れい圓」問題は Samyutta-Nikāya 44 (avyakata-saññutta)

に於いても繰返し論じられてゐる。なぜこの問題についての回答

中の資料に關しては、和辻博士『原始佛教の實踐哲學』1—11頁、

渡邊株離教授『佛陀の教説』一九五頁参照。

(16) 原文には mū ḥāññāpū ग्रीष्मान् ता ति ति mā ḥāññāpū 。

(17) Oldenberg: Die Lehre der Upanishaden. S. 193, Ann. 2. たゞ

Scherbatzky (Central conception, p. 68, n. 1.) せる。dhar-

ma は “an element, but a subtle and immortal one” と譯され、

Geiger (op. cit.) は “dieser Gegenstand” と譯すが、しかし、む

し「釋法」或ひは「教法」の意味である。

カベリュヤンの成立年代(4) 中村

(18) なほカータカ・ウバニシャッフルの前掲一句と次に掲げた Samyutta-Nikāya 44 (avyakata-saññutta) の最後の標題とに於いても、

等しき構想を認めらるゝが、いかん。

「十力の石山より逃り出る」

涅槃の大海上に及び

八丈〔聖〕道の水〔を灌ぐ〕

勝者の語なる河よ、長く〔われらを〕運べ」(立花後道氏譯) 南傳

大藏經 第十六卷上 117頁)

トガトも如來の死後の存在非存在を問題とした後で、かく云はれてゐるのである。

(19) 宇井博士、『印度哲學研究』第一卷(六)――(六)(七)頁。

(20) Oldenberg: op. cit. S. 288-289.

(21) ナチケータバの物語がその精神に於いてチャータカと相通する。

Oldenberg: Dialogues of the Buddha, Vol. II, p.

162 も主張してゐる。特に羅刹より半句の偈を聞かんがために身

を捨てた雪山童子の話(心地觀經第一卷、大般涅槃經第一四卷)は支那、日本にまだ有名である。

假令<sup>ハシメテ</sup>が奴僕の口より聞かむといふ

深義具へし一偈を聞かば、人王よ。

敬ひ深く、われ奉仕せむ、その者に

きじと、正法に、われ満足るを知らむれば (Mahisutasonmaji-

taka, v. 48)

他方バラモン教の書に於ても、例へばマハーバーラの中の有名な貞女サーヴィトリー (Savitrī) の物語では、サーヴィトリーが死神ヤマに同つて、自分で對する最後の最重要な賜物として、夫の生命を復してくれるやうに懇願し、遂に成功することが述べられてゐるが、ルーピダは必ずしも夫の身を思ひわづらふ貞女の態度が主題となつてゐるのであつて、萬人に妥當する普遍的な法を聞かうとする態度とは全然無關係である。

(23) Oldenberg: op. cit. S. 351 Ann. 127; J. N. Rawson: The Katha Upanisad. 1934, Oxford, Introduction, pp. 48-49.

(24) 井井博士『印度哲學研究』第二卷「佛滅年代論」によれば、同博士の提出された年數がその後の研究によつて多少前後に動くことはあるかも知れないが、しかし佛滅年代がアショーカ王の即位より約四年前であるといふことは、印度の諸部派所傳の古い諸經論の一齊に傳へてゐるといふべきであるから、この概數は動がすじがでない。

(25) 『印度哲學史』一四八頁。なほ『印度哲學研究』第一卷一三五頁参照。Hopkins もカータカ、シヴァーティーシタラ、マイトリーの諸ウツリシャツカを紀元前四世紀の成立と見做してゐる (JAOS. XXI, 1901, p. 336)。

(26) Radhakrishnan: Indian philosophy, Vol. I, p. 142.

(27) カータカ・ウベニシャツカの、殊に始の部分には、まだグラー

だぬいと想はれる。(なほ佛滅年代がアショーカ王より百年前でないことは既に徳川時代に富永仲基が『出走後語』に於いて『大智度論』に依つて主張している)。

(28) ルのベーニ年代論なるものだ、十二世紀、すなはちベーニより千數百年後に成立した Kathāsaritāgama といふ物語の中の記述に本づいて據がれどものじゆが、ルの物語の記述は歴史的資料としては甚だ信頼のほかないものである。従つてベーニ年代をII五〇年頃となすのも極めて根據薄弱である。但しベーニ文典の中には、「ギリシャ人」 (Yavana) に言及してゐるから、彼の年代がそれより前に動かすことは疑ひへ困難である。むしろそれより後半以下の方が可能である。(ed. Otto Böhlting: Pāṇini's Grammatik, Einleitung; Winteritz: GIL. III, S. 383)

トヨトミ的な考へ方あると穀類の名残が認められる（Oldenberg: op. cit. S. 203）

(28) Oldenberg, op. cit. S. 289.

(29) 大毘盧遮那經第100卷（大正11年刊）七卷九十九頁中）et. Svet. Up. III. 8; 7.

(30) 稲庭辨國博士『佛教經典概説』七八頁以下、木村泰謹博士『印度文學史』（昭和十二年）七八頁。

(31) Hopkins: Great Epic of India, p. 28.

(32) Oldenberg: op. cit. S. 205; O. Strauss: Die indische Philosophie, S. 64; Winteritz; History of Indian literature, Vol. I, p. 288.

(33) Deussen: System des Vedanta, S. 33.

(34) Hopkins: op. cit. p. 33 ff.

(35) Winteritz: History of Indian literature, p. 475.

(36) Hopkins: ERE. Mahabharata の脚注。

(37) 第四回（caturtha）の羅刹は飛んで大業の名前を影響に入りて成立したやうである。

(38) Deussen: System des Vedanta, S. 32 ff.

ムーラハヤマルの魔界年譜(4) 中本

(39) Deussen: Allgemeine Geschichte der Philosophie, I, 2, S. 24-25

(40) Hume: Thirteen Principal Upanishads, p. 5, n. 21. 井井轉注『金剛經疏』1冊1回。たゞ R. Zimmermann (Die Quellen der Mahanirvanya-Upanisad, 1913, Leipzig, Diss.) によれば、

カタニヤハルナの廣く中期カタニヤハルナの文句を引用してゐるが、たゞ中期に屬せしものといふ點から中期の最後に置かれたものとおもへる〔註〕。またガルバダーナのカタニヤハルナとはサーカヤ説の影響が顯著である事実によつて、ソボタ那羅密陀マリッチャラの古は據くらる（Die Sankhya-Philosophie, S. 26, Ann.）。

〔註〕ヘーヒナ九頁、一一三回頁註〔註〕の項記。マーリの文

典のナレヤ瓦ナニの體がゆゑ、Yavana ('Hiones or Greeks') ～印度人の接觸は、前二二七年～二二六年のアノキサンダーの印度遠征以後生じたものでなければならぬ。しかし、ペーリの年代より前の期の得なことであるのが、從來の論者に共通の意見である。しかも、印度人はアレキサンダーの遠征の過が以前から、イラン人（乃至ムルシャ人）を通じて間接にギリシャ人に關する知識を有してゐた脚でゐる。Yavana の語形はギリシャ語からの直接の轉化と見ゆるが、實の古代ギルシヤ語を通じての轉化と見ねぐあひある。詳細は別に論じて貰いたい。 橋 一 読